

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画 talk baton 17 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



木戸氏を囲んでトークバトン17開催



ゲスト
コンテンツ
プロデューサー
木戸俊介氏

事故をきっかけに下半身完全麻痺となるも再び「歩く」ために日々奔走しながら、脊髄損傷患者の生き方の選択肢拡大のため多岐に活動。

(株)博報堂に勤務していた2015年、交通事故に遭い、胸椎損傷から下半身麻痺となった木戸氏。突然の障がいに向き合いながらも、数々の夢に向かって果敢にチャレンジしていくその行動力や思考はどこから生まれ、木戸氏の活力になっているのか。自らのエピソードをもとに話を伺った。

■元健常者、今障がい者

木戸 大学時代は筑波大学でサッカーをやっていた、博報堂で営業をしていたのですが、交通事故で車いす生活になりました。元健常者で、今障がい者ですが、さらに元障がい者になるために現在も毎日リハビリを行っています。健常者と障がい者のどちらも知っていることは自分が活動していく上での強みだと思って生きてます。

僕は「気持ち・メンタル」が大好きです。日常のなかにある段差などの車いすにとってのバリアも実は、コミュニケーションを取れたり、手伝えたりするチャンスの場合だと思っています。実際に、言い回しや表現だけでもポジティブに考えるだけで、物事が好転していくことは実感として持っていて、今日はほとんど「気持ち・メンタルって大事」という話です。もしそれが気に食わんって方は帰ってもらって結構です。(笑)



ユニバーサルビーチプロジェクトの様子

一同 笑

木戸 事故から5年たって今では「ポジティブモンスター」なんて言われたりもします。一生歩けないと診断された日から、どのような経験を通して気持ちが浮き上がってきたかという話もシェアできたらと思います。

■ハードよりハート

木戸 脊髄損傷は数ミリずれれば骨折で済んだ可能性がある怪我です。当時は「なんでやねん!」という思いもありましたが、事故後に出会った人たちのおかげで考え方がどんどん変わっていきました。

①両脚切断の佐藤さん

現場監督のような立場で働いていたが、重機の誤作動により両脚が切断。足が動かない僕と足がない佐藤さん、どっちが生きてくうえで厳しいですかねという話をしました。その時の佐藤さんが言った「どっちもめっちゃ厳しいけど、どっちも最高の人生になる可能性がある」という言葉に、自分も頑張らないと、と思えました。

②オーストラリア人のアンディ

半年間、リハビリのためオーストラリアに行ったのですが、そこでアンディに会いました。アンディはフリースタイルモトクロスのライダーでしたが、脊髄損傷になった今も同じ競技を続けています。「体の自由が利かない今の自分の方が難しいからやりがいがあるし、子供や障がいのある子にちょっとでも勇気を与えられたら」と話すアンディがとてもCOOLでした。

③ペリー・クロス

オーストラリアでは著名な方で、脊髄損傷により首から下は一切動きません。そんな重い障がいを持ちながらも、世界中を回って再生医療の研究費を投資家から集めてくる事業を行っています。元ビジネスマンという特徴を活かし、自分だからこそできることにチャレ



ビーチマットを畑に導入

ンジしている姿を目の当たりにした僕は、ここでへこたれている場合じゃない、と強く思いました。

このような人たちとの出会いを通して、自分だからできるコト、自分にしかできないコトがあるはず。みんなに負けないように自分も頑張ろうと思えるようになりました。障がいを持っていると、毎日いろんな場面でバリアに出くわします。その度に、怪我によってできなくなったことを考えるのではなく、怪我をしてからできるようになったこと、怪我によって知ることができたことに目を向けるような、発想の転換をずっと続けてきました。事故による脊髄損傷も今では、「あと少しずれていたら、死んでたかもしれへんに、生きててラッキー（しかも上半身だって脳だって使える!）」と心の底から思えるようになりました。

■ハートで超えるユニバーサルデザイン

木戸 4年ほど前から「須磨ユニバーサルビーチプロジェクト」というNPO法人の代表をしています。ビーチにマットを敷くことで、車いすのまま水際まで行くことができ、そのまま海に入れるようになります。オーストラリアでリハビリをしていた時から、実現したいと思っていたチャレンジでした。健常者も障がい者も関係なく、みんなで一緒にやる、楽しめる、そんなアクティビティ空間をこれからも作っていきたくと思っています。今ではビーチに限らず、畑や山登りなど様々なフィールドに活動の場を広げています。

オーストラリアでのリハビリ中、とても印象的な出来事がありました。バスに乗る際、乗降補助スロープを使わずに自力で乗り込もうとしていたら、運転手がとても好意的に受け止めてくれ、そのチャレンジを見守ってくれました。成功するとバスの乗客までもが拍手喝采。こんな前向きな雰囲気は日本では有り得ないのではないか、お互いが理解しあうことで、ハートで超えられるバリアはたくさんあると身をもって実感しました。日本の優先エレベーターもその一例だと思います。少なくとも僕が訪れたことのある海外の国には、優先エレベーターはありません。動線を分けなくてもコミュニケーションを通して自然と協力して利用することができます。日本のように完全に動線を分けてしまうと、一生お

互いのことがわからないままです。一緒のエレベーターでごちゃ混ぜでいいから、まずはコミュニケーションをとって、お互いを理解することから始めるべきじゃないかなと僕は思っています。

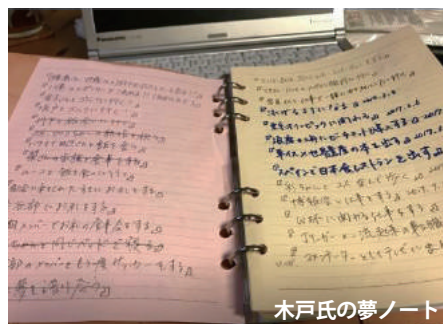
質問者 ユニバーサルビーチプロジェクトはどのようにして始めたのですか。

木戸 オーストラリアでのリハビリ中にビーチマットに出会いました。そこでこのマットを須磨のビーチに敷くことを決意しました。帰国後、実現のためにクラウドファンディングや行政協議などを始めました。

帰国してからの約2年間はほとんどこのビーチマットの活動をしていました。まずは何も考えずに、とにかくマットを敷くところまでやってみよう、そんな風に考えてました。実際の活動はほとんどボランティアで、利益はありません。しかし、この活動を通して、様々な人に知ってもらって、仕事につながる機会も増えてきています。

■逆転の発想、キャリアプランニングも逆算で

木戸 事故後、前向きに発想することが習慣となり、仕事に対しても考え方が180度変わりました。それまでは目の前の仕事に追われ、将来の夢や目標のために行動することがなかなか難しく、踏み出すことができていませんでした。しかし事故をきっかけに、5年後、10年後、もっと先の理想の自分を強くイメージするようになりました。そこにたどり着くために、今何をしなければならぬのか、1年後、2年後どういう状況になっていることがベストなのか。具体的な目標を掲げることで、日々の行動をこじつけでもいいから、そこに向かって進むように意識しています。自分の人生は考え次第で圧倒的にポジティブになる。事故によって「死」を意識したことで、人生がよりイキイキしてきたと言っても過言ではありません。



木戸氏の夢ノート

■夫婦の夢ノート

木戸 キャリアプランニングと並行して、夫婦で「夢ノート」を始めました。記した夢は大きいものから小さいものまで様々あります。事故当時は考えられなかったり、思いもつかなかった夢が、今も増え続けていて、現時点でまだ叶っていない夢は60個ほどあります。当然「再び歩く」こともその1つです。

質問者 これまでに一度書いて消した夢はありますか。

木戸 消したら負けだと自分では思っています。なので書くときはかなりの覚悟をもって書きます。最近は少しずつできることが増えて、スケールが大きくなってきて、書くことに躊躇してしまうこともあります（笑）。ノートに記して、講演などの度に皆さんの前で発表して、その夢を叶えるための行動を日々意識するようになっています。たとえ叶わなくても、その夢のために自ら行動すること、自分が納得できるまで努力することで、十分幸せな人生になるんじゃないかなと思っています。

「車いすでも最高の人生。歩いてもっと最高の人生。」そんなことを考えながら、将来、自分の子供に自分の人生を面白おかしく伝えられればいいなと思います。これもノートに書いた僕の夢の1つです。

(文責：出来)

talk baton 17 を終えて

健常者と障がい者、双方の視点を持つ木戸氏のエピソードや考えを知り、互いの立場や状況を理解し尊重する「ハートのユニバーサルデザイン」の大切さや可能性を強く感じました。ポジティブな発想で周りの人を笑顔にしていく木戸氏の活動は、設計者としても見習うことが多いと思います。

今年の夏はU-35委員会でユニバーサルビーチプロジェクトのお手伝いもできればと思います。

対談日：2020.02.27
場所：OSTR一級建築士事務所
(大阪市北区)
モデレーター：出来 佑也 (昭和設計)